

東洋史研究

第十一卷第四號 昭和廿七年二月發行

西漢の首都長安について

宇都宮清吉

わたしは一九五一年の東方學第二輯に、「西漢時代の都市について」という論文を書いた。そこにおいて、わたしは西漢時代の都市と商人のアウトラインについて論じた。ここにはさらに、西漢時代の首都であつた長安を中心として記述し、かしこに書かなかつたことをおぎないたいと思う。

武帝は西南夷方面を開發し、又四川の西部地方を開發することによつて近くの諸民族と貿易するほか、廣東と長安を直結することによつて、南方貿易の商利を獨占しようとはかつた。このときの道路開拓には、四川の民衆が無數に徵發され、そのギセイは極度に達した。史記の西南夷傳ならびに司馬相如傳にはこのことが記るされ、民衆の反感が強くあらわされている。さてしかし、そこに示されている、いわゆる民衆の反感なるものの本質は本來いかなるものであつたらうか。

わたくしは思う。これは單なる民衆の反感ではない。それは實は、四川における傳統的な貿易商人社會の反感にほかならな

かつたのではないか。もともと、これら邊境の貿易上の商利は、四川方面、なかにも成都とか臨邛とかの都市に住む大企業家や兼貿易商人に、獨占せられていた。四川の織物、竹木の製品は遠くインドを通じて中央アジアまで進出していたことは、かくれもない事實であつた。(史記大宛傳) 鐵製品は近隣諸民族との重要な貿易品であり、近隣諸民族からは樊人ぼんじんの奴隸とか、笮馬さくば牛などが輸入せられ、巨大なる交易の利益があつた。そして、これらの貿易は、四川の商人社會によつて傳統的に獨占せられていたのである。(史記貨殖傳) 武帝の四川邊境開發計畫は、おそらくこのような四川商人社會の傳統的商權を破壊すべきものであつたにちがいない。だから、四川におけるいわゆる民衆の反對運動は、實はかくの如き階層によつてリードされたものと考えらるべきである。司馬相如は、武帝の意志にしたがつて、一時は四川の西部諸民族との直接交易路の開拓使となり、大いに活躍したが、しかし、やがて四川商人社會に買収せられ、武帝の政策にたいする反對意見をのべる文章起草するにいたつた。それは前一二九年(元光六年)にかゝれたもので、文選に「蜀の父老を難す」という題で收めてられているものである。この文章はむろん、史記の司馬相如傳にものせられている。

この文章は、司馬相如が成都にあつまつた、四川の有力者二十七人の會合に出席し、かれらの不平を非難するかたちに見せかけて、實は武帝の政策の非であることを説くものであつた。この文章の中の二十七人の有力者は、「耆老大夫薦紳先生」ということばでよばれている。この二十七人の有力者こそ、四川の貿易商人社會を代表する連中にちがいない。司馬相如は、四川の大製鐵商人卓氏と結婚關係にあつた。かれは卓氏、鄭氏らの企業家兼貿易商を中心とする、四川大商人のなかまのベツトであつた。はたしてかれは、これら商人社會から買収され、かれらの傳統的商權を破壊する意味をもつ、武帝の四川邊境開發計畫に反對する文章をつくらされるにいたつたものと考えられる。かれの文章の表面には、そのようなことを、直接に示すものはない。しかし、史記の司馬相如傳には、相如のこの文章を記録したすぐつぎに、——その後ある人から、「相如は四川西部開發使となつていた當時いろいろをうけとつた。」と告發せられたために、失脚した。——と書いている。

司馬遷のこのような書き方は、かれ一流の作文テクニクで、相如の起草した反対意見文書と、わいろとの關係を暗に肯定するものであるのだ。そして、われわれは司馬遷のこの書き方によつて、相如の文章の背後にひそむ四川商人社會の、巨大にして根づよい勢力を、キリの厚いまぐを通してのぞむ、かの大建築物のごとくにも無氣味に、反映しているのを感じないわけはいかない。

漢書の食貨志上に有名な龜錯のことばがある。それには、都市商人の活動とその生活ぶりをのべて、

商人の大なる連中は買いしめては利息を倍にし、小なる連中は市場にのきをならべてものを賣る。カネが余れば、必ず珍らしいものを買ひあさつて、日毎都市を遊びまわり、高貴の人々のほしがるものがあると、必ずなん倍にももうけて賣りつける。だから、かれらの男子は耕さず、女子ははたおらずして、美服美食を當然のこととし、その身は農民の苦しみをしらずして、しかもかれらに百倍千倍する利益をうる。かれらはその富の力にものをいわせて、王侯と社交界を結び、勢力は役人をこえ、利益をもつて他人を支配し、千里をへだてるなかつ同志、たがいに訪問しあつて相誇り、道路には、かれらの威儀を正してゆきかう姿がみち／＼、そのこえた馬、絹のくつ、ま白き羽二重はすそを長々とひいている。これぞ商人が農民を兼併し、農民の多數が没落する大原因である。

と書いている。手みじかな、文章のうちに、都市商人の生活ぶりと、政治的、經濟的、社會的作用をよくつたえていられる。これらは、かの司馬相如傳における四川の商人社會とともに、西漢時代の都市商人の實力を明らかにものがたるものである。

さて、都市における商人社會を中心とする都市的生活がいかなるものであつたかを知る史料は、ほとんどない。地方の都市については、戰國時代のものであるが、當時すでに經濟の中心として繁榮していた臨淄のありさまについて、生々とのべられたものが一つだけある。

戰國策第八卷に、

臨淄のまちには、七万戸の民家がある。……かれらは、はなはだ富んで充實している。その住民はすべて、笛を吹き、琴を鳴らし、筑を打ち、琴を弾じ、さては、鬪鶏、犬競走、スゴロク、けまりなどにうち興じている。臨淄の街路、車はそのこしきを打ちつけあい、人は肩をこすりあふほどの大人出の波。襟をつらぬれば、そのまゝとばかりとなり、たもとをあげれば、そのまゝ幕となる。かれらの流す汗は、雨かともうたがわれるほど。家々はゆたかに、その意氣やたくして大いにあがる。(蘇秦が趙のために合従を説く章)

といつてゐるが、西漢時代においても臨淄の繁榮ぶりとその生活がおそろえたとは思われない。(史記主父偃傳)また、これはつと後世の人の文章であるが(一世紀時代)太平御覽卷七十六車の部にひかれた桓譚の新論のなかにも、春秋時代の楚の都の繁榮ぶりをのべたものがある。しかし、その書きかたは、戰國策の前記の臨淄の繁榮ぶりをのべたものをおそつた、すこぶる古めかしい定型的なもので、細まかなことは何もわからない。こんなふうに書いている。

楚の郢都の繁昌ぶり、その車はこしきをひつけあい、ひとは肩をぶつけあい、市場の道にもみあつてゐる。大げさないろいろかもしれないが、「朝新しいきものを着て出たのに、夕に家にかえつて見れば、すっかりやぶれてしまつてゐる」といわれる。

郢都の地理的位置から、このようなことが當然想像されるが、その書きかたには個性がなさすぎる。いつたい、紀元前後以來、中國人が都市の繁榮をのべるときは、きまつてこんな書き方が一つの型になつてしまつてゐる。かれらの書き方には、それぞれの都市の個性的繁榮ぶりをのべるといふ精神はきわめてとほしいのである。これは、一、二世紀以後になると、中國人が都市をその眞の生活面、特に經濟面において、こまかく觀察記述するといふ精神を失なつたからで、それは同時に、かれらにおける都市の經濟的意義の減退を示していることでもあり、經濟形態が中國世界的な貿易經濟の中心としての都市から、せまい地方的都市に變化し、都市が主として、その周邊の鄉村に營まれる莊園經濟によつてさへえられ、莊園生産品のせ

まい市場としてのみ存在するという現象と相應するものと思われる。(名古屋大學研究論集史學I所 收、史記貨殖傳について參考)しかし、それはともかくとして、まずこうした材料によつて、前二世紀から以後の都市における商業社會を中心とする、民衆生活の趣味と傾向をも、いづらかはおしはかることができると思う。

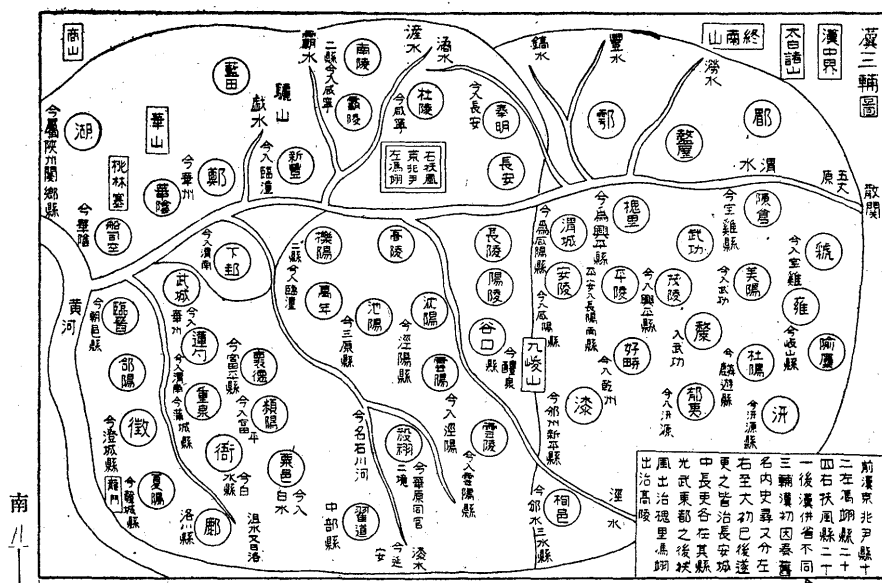
西漢時代の都市生活については、實はいまいつたように、直接そのありさまをのべたものはほとんどない。ただ長安は首都でもあつたため、いづらかは明らかに、當時の史料を通じて直接に知る材料もないことはない。それゆえ、今はしばらく目を長安にむけて西漢時代の長安生活について語つてみよう。太平御覽卷三六四人事部額のところにひかれた東觀漢記を見ると、馬廖が申しあげたことばに、こんなことがある。「そもそも、政治を改め、風俗を改良するには、まず一切のことに標準をたてる必要がある。長安人はこんなことをいつている」——長安のひとびどが、ちよつとまゆ毛を太めにすれば、地方ではおでこの半分もまゆ毛が占領してしまふような太まゆ毛がはやる——

という文章がひかれている。おなじく、卷三三七の髻のところにも、同書のつづきをひいて、

またいわく、馬廖が長樂宮に申しあげたことばに、こんなことがある。「長安人のいいぐさだが、長安の人々が、ちよつと高めの髻をすれば、地方では、高さ一尺もある大髻がはやるようになる」

とある。

これでもわかるように、長安は當時における世界的流行の中心であつたのだ。だから、長安に見られることの多くは、また他の地方の大都市においても見られたにちがいないこととすべきである。以下には、主として長安のことばかりを述べるが、それは實は同時に、他の大都市にあつても、同じであつたろうということを前提として論じているものであると承知してもらいたい。わたしはこゝで長安をば、西漢時代都市の一つのこよなきモデルとして考えるのである。



二

さて、西漢時代の長安は、京兆尹にあり、それは右扶風、左馮翊とともに、三輔といわれる行政區劃をなしていた。(三輔黃圖卷一。三輔沿革) そのありさまについては元の李好文のつくつた長安志圖をみるとよくわかる。(經訓堂本長安志に附) 三輔の地は大體、渭水の盆地で、東は函谷關、西は大散關にかぎられ、南は終南山がせまり、北は北山にくざられている。東西およそ三〇〇キロ、南北はいちばん廣いところで一〇〇キロばかりの不整形なハシゴ形にちかい形をした地域である。ロシング・バックによれば、この地帯は今でも、非常に耕作に適したところで、(J. Lossing Buck; Land Utilization in China) 漢代においても、ここが肥沃な土地であつたことは史記、漢書にいくども書かれている。西漢の都を長安にさだめるよう建言した劉敬も、そもそも、秦地は、山をめぐらし、川がとりまき、四方ともとじられた要害です。もしものことがあつたときには、百万の兵をそなえることができます。秦が残したこのまたとない財産、この肥沃な土地に根據をおすえくください。これぞ天のくだされた寶のくらです。ここによれば、華北東部は完全におさえることができますしう。

といっている。長安はこのように、當時においては、まず第一に、華北東部に發展している有力な經濟社會、商人乃至豪族の勢力を政治的に軍事的におさえる要地であつた。秦地とは、秦がおこつた地を意味する。秦はここを根據として東方に君臨したのであつた。漢は劉敬のことばを用いここに都をさだめた。(史記劉敬傳) 三輔は秦代には内史といわれていたが、景帝時代ごろ(前一五六)にはすでに左右内史にわかれていたらしい。武帝の太初元年(前一〇四年)に左内史は左馮翊、右内史は渭水の北の部分が右扶風、南の部分が京兆尹というように區分せられ、三部の長官はみな長安に駐在することとさだめられたようである。(漢書百官公卿表上及び地理志班固の原註。王先謙の補註。長安志所收、李好文撰長安志圖など參考) 三輔にはまた、他の郡とおなじく、警備を司る都尉がおかれていた。京輔都尉は華陰に左輔都尉は高陵に、右輔都尉は郿にあり、(三輔黃圖) 長安にいる執金吾はその總司令であつた。(漢書百官公卿表上) このように三輔は行政的に三區分せられてはいるが、一面では離すべからざるものとして、つねに固く三位一體的に結合されていた。(鎌田重雄氏・漢代の三輔について―漢代史研究所收を參考)

三輔の地には、すでに秦代において、巨大な都市が營まれていたと思われる。それは秦の都咸陽である。咸陽には秦の移した豪族だけでも、十二万戸にのぼる大人口があつたことが記るされている。(史記秦始皇本記及び、三輔黃圖) しかし、そのこまかいことは全く知らない。長安のまちは、咸陽よりやや東南の渭水の南に建設せられ、その歴史は漢とともにはじまつた。長安城の建設とその經過については三輔黃圖に、てみづかに記るされている。

長安は高祖七年(前二〇〇年)に宮城を修築され、帝はここにうつり住むことになつた。この城はもと秦の離宮であつた。しかし、その規模は小さかつたので、惠帝(前、一九四―一八八年)の時、増築をおこなつた。すなわち、その元年(前一九四年)正月にはじめて城壁をつくり、三年さらに長安城外六百里以内の男女十四万六千人を集めて、三十日間勞働させた。城の高さは三丈五尺、下の厚さは一丈五尺ある。六月、さらに勞働刑の囚人二万人を出して、繼續的に勞働させ、五年(前一九〇年)にいたつて、又人民十四万五千人を三十日間使役した。この年の九月、いよいよ城は完成した。周圍六十五里。漢舊

は南斗星の星座の形をし、北は北斗星の星座の形をしている。——といつてあるのは、その不整形のなよりの證明である。漢の長安城は、その位置といい、でき方といい、まつたく、かの管子の乘馬篇にでてゐる記事のとおり、古代中國都市の典型である。管子の文に、

そもそも、國都をたてるには、大山のもとでなければ、ひろい川のほとりをえらぶべきである。なんとすれば、地勢が高すぎれば、日でりにあつても、すぐ水に不足するし、低くすぎても、洪水のおそれがあつて、ていぼうや水はけに注意なくてはならないからである。ゆえに、都市をたてるにあつては、つねに自然の條件と、地勢をよく利用すべきである。というわけで、城郭は必ずしも、定規どおりにはつくられず、道路も物さしどおりにはつけられないのだ。

といつてゐる。これが管仲自身の思想であるかどうかはむろん疑わしい。(羅根澤氏、管子探源にはこの篇を戰國末政治思想家の作としてゐる。)むしろ、戰國時代

の政治思想家のものとする方が正しいと考えられる。この全文には、都市の建設ということについて、人間の意志的要求を、自然の理法にしたがつて實現させようとする態度が充分にうかがわれる。そして、これはまたいかにも、管子學派らしい戰國的、法家的現實主義、つまり實務的精神の一表現でもあると思われる。西漢の都長安の建設は、實に管子にいわれてゐるとおりに、自然的條件と人間的要求とを完全に一致させて作りあげられた、ごく自然的な發展的城市都市であつた。西漢のはじめ、長安城の建設せられつゝあつたときには、形式的な又非常に理念的な孔子流哲學の見解は、いまだ政治的にはなんの勢力もたず、とりあげられるにもいたつてゐない。ゆえに、その基礎的建設にしたがつた人たちは、自然、法家的精神によつてきたえあげられていたことはいふまでもない。ことに、主として長安城建設の任に當つた蕭何のごときは、(史記高祖本紀八年の條)着實このうえない法家的實務精神に徹した人であつた。(史記蕭相國世家)かくて、長安が法家的合理主義の一表現であるとも、決していいすぎでも誤りでもなからう。班固や張衡が排斥すべき都としての長安をうたつた時、かれらは實に長安をこの意味における不徳な政治的軍事的にして、かつ世俗的な都と性格づけたのであつた。(文選、西都賦・西京賦。)それゆえ、西漢の

都長安城が、後世の首都建設に見られるように、むやみに観念的な考工記式アイデアに一致しないのは、むしろ當然である。三輔の人口は、元始二年（紀元二年）の調査によれば、次表（一）のとおりである。

（西漢三輔戸口表）一

地名	戸	口
京兆尹	195702	682886
左馮翊	235101	917822
右扶風	216377	836710
計	647180	2437418

しかるに永和五年（紀元一四〇年）の記録によると、同じく次の表（二）のようである。（後漢書郡國志）約一世紀間における、このようにはげしい人口の變動は、一つは帝國の首都が長安を去つて、洛陽にいつたことにもあるが、主たる原因は安帝のころ（一〇七年—一四四年）以後多年にわたつて、羌族の侵入がはげしく、くりかえされたために、この地方の荒廢が甚だしかつた、（潜夫論卷五邊議篇、實邊篇）ことによるのは明らかである。三輔のなかにある都市の人口數で、ほぼ推定できるものは次の三都市である。（表（三）を見よ）

（東漢三輔戸口表）二

地名	戸	口
京兆尹	53299	285574
左馮翊	37090	145195
右扶風	17352	93091
計	107741	523860

三

縣名	戸	口
長安	80800	246200
長陵	55057	179469
茂陵	61087	277277

わたしはかつて、長安の都市プロパーの人口は80800と推定した。（東方學第二輯にのせてある）（西漢時代の都市について）このような都市プロパーの人口推定が、はたして正しいかどうかについては、なお疑問であるが、少くとも當時の東方の大都市臨淄の十万户（推定人口三十七万）と考えられるものにくらべれば、非常に人口の少かつたことだけは明かであると思われる。長安の人口が、その後どんな變化をしたかについては、數字的には全く調査の手がかりがない。しかし、三輔の人口の激減という一般的狀況から考え、長安人口が一世紀、二世紀の間において、はなはだしく減少したことは、論ずるまでもなく明らかなことと思われる。それはともかくとして、おそらく長安の都市プロパーの人口は、紀元の前を通じて十万をこえたことはなかつたであろうと推定せられる。長安の政治的重要性にくらべて、人口が割合に大きくないのは、なんといつても

經濟力において、西方陝西省と東方の諸地方とを比較すれば、西方がはるかにおとつていたためと思われる。たゞ西漢時代三輔の人口が、東方の諸郡に較べて大して見おとりしないことは、東方學第二輯のわたしの論文によつて見てもわかるが、それは當時政治的意味からして東方の社會的、經濟的繁榮地帯を抑壓する目的で、多くの人口を強制的に長安附近に移住させたことに、その大きな原因があつた。西漢時代にはよく、強幹弱枝ということがいわれた。それは前述のような強制的移住政策をいつたのである。班固の西都賦に三遷七遷ということばがある。三遷とは三種のえらばれた人々、すなわち、「高官の家々、富人及び、多くの人々を使役する兼併家たち」を意味する。七遷とは高祖以下宣帝に至る七つの陵墓を中心として、代々建設せられた都市に強制的に移住せしめられたものをいう。（文選卷一班孟堅西都賦注）かくして高祖のとき、齊の田氏や楚の昭氏、屈氏、景氏ら十万を移住せしめ、（史記劉敬傳）後代々相當の人口をこの地に移したのである。これは宣帝のときまでつづき、元帝のときに廢止された。（この事情については、漢書元帝紀永光四年の條及陳湯傳をみよ。なお、濱口重國氏「漢書地理志に、高祖の長陵、武帝の茂陵の戸數人口が特に記されているのは、兩帝が非常な有能の君主であつたために、新都市の建設が、大規模に行われ、そこに出現した都市が非常に繁榮していたからでもあろうか。元帝以來この移民政策はやめられたのであるが、それに深い歴史的意味があるように思う。わたくしは、かつて、それを孔子流哲學精神の高揚と政治化、及びそれを通じて、地方豪族勢力の成長したと結びつけて考えてみた。」）（秦漢政治史上支那地）（理歴史大系第四卷）今もその考え方をすてないのみか、さらにいつそう實證を加えて研究してみたいと思つてゐる。

長安は、わたしが「西漢時代の都市について」（東方學第二輯）という論文において示したように、當時の中國世界の一つの經濟的中心ではあつたが、それよりもさらに重要なことは、この都市がどこまでも西漢帝國の政治的中心であつたことである。班固が秦的ないまわしい都として排斥した一つの理由も、實に長安のこうした軍事的、武力的な、したがつて法家的政治の中心であつたことにある。鹽鐵論に當時の副首相であつた桑弘羊のことばを載せて、

首都から東西南北に幾山河、幾郡國を経て通ずる諸地方のいくたの繁榮せる大都市は、なべてその町すじ五方につらなり、そこは商人の群集するところとなり、あらゆる物質の殖産するところとなつてゐる。(力耕篇)

といつてゐる。これは長安を、中國的世界經濟圈全體の一大中心と考えたようないい方であるけれども、實は當時の世界經濟圈の中心點は、すでにいつたように、長安よりはむしろ東方の河北、河南、山東の方面にあつたのである。(前掲、西漢時代) 桑公羊は中央の大官として、つねにすべてを、政治的帝國的にのみ見るたちばにあつた。だから、この場合のかれのいい方も、決してこのかれのたちばを見落して、うけとつてはならぬと思う。

長安から四方に出ている商業交通路の狀況はむろん、くわしいことはわからない。ただ、班固の西都賦には、東方からの大輸送道路としての水路のありさまをのべて、——東の郊外には大運河があり、渭水と黃河とに通じ、船を山東にうかべ、淮水より湖沼地帯を経て海とつながつてゐる。(意譯)——とあるは注意すべきであらう。班固のいつてゐる大運河に關しては、史記の平準書と漢書の溝洫志との間には、全く反對と思われる記事がある。これについて、簡單な考證が馬元材氏の「桑弘羊年譜」二一—二二頁に見える。劉奉世は、その存在について、否定的であるが、班固の賦によれば、こうした大運河の存在を、肯定しなければならぬように思う。長安が世界的都市であつたシンボルは、その町のなかを走つてゐた、藥街という外民族の使者の居留地であり、はるかなる異域の珍貨に飾られた美しい宮殿、例えば三輔黃圖に示された溫室殿、清涼殿、奇華殿などであり、さらに長安の西郊にあつた上林苑という帝室直屬の庭園であらう。上林苑には西域や南方諸國の鳥獸草木が多く飼養せられてゐたのである。(西都賦及び三輔黃圖)

さて、當時の都市には、すべて官設の市場が設けられてゐた。そして市籍あるものが、そこで商賣をすることが許されてゐた。かれらは市租を出さねばならなかつた。(この項については、漢書何武傳、加藤繁博士「漢代における國家財政と帝室財政」(東洋學) 報八卷百八十三頁及び同博士「宋代商稅考」史林第十九卷第四號六五〇頁を參照のこと) 長安には、このような市が九つあつた。それは、長安の都の城内と城外とにあつた。三輔黃圖によれば、その規模は、民衆の

居住區である「里」四つ分の廣さがあり、それぞれ方二六六歩あつた。九市のうち、名の知られるものは、東市、西市、直市、柳市などで、現存の三輔黃圖にも記るされている。東、西兩市は城内にあつたと思われる。直市は長安の西の郊外にあり、(三輔黃圖)柳市も長安城の西郊の細柳倉のほとりにあつた。(漢書游俠傳中の萬章傳及び注)その他、太平御覽卷八二七市部にひかれた「漢宮殿疏」によれば、やはり長安城外の渭橋のほとりに門市というのがあり、交道亭市というのが便橋の東にあり、季兒市が雍の東道にあり、細柳倉市が細柳倉のほとりにあつたと記るされている。この細柳倉市は、むろん漢書や三輔黃圖の柳市であろう。又西漢の大學は長安の西北七里にあつたが、(三輔黃圖)王莽のときに、そこに學生らのために宿舍と市場とを設けた。太平御覽卷八二七にひかれ三輔黃圖佚文にはその規模がのべられてある。長安城の東七里のところには、常滿倉という倉庫があつて、その北に槐市という市場があつた。槐市も學生のための市場で、書籍とか樂器というものが賣られ、各地の生産物が學生によつてもちよられ、その市で交易せられた。かれらが槐樹の並木のプロムナードを散歩しながら、學談をたゝかわしたほゝえましい風景が、藝文類聚卷三八禮部上學校の條にひかれた三輔黃圖の佚文に書かれている。もつとも、太平御覽の三輔黃圖佚文と、藝文類聚のそれとは、内容がよく似ていて、王莽の大學市と、槐市とが同じものか異つたものかは、今にわかに定めがたいうらみがある。このように市場は城内ばかりに限らず、近郊にも設けられていた。その近郊の市場の所在地は、官設の倉庫の所在地のような物資の集散する場所、または、大學の所在地のように、消費者の多く集る場所、あるいは、交道亭市のように近郊の交通の要所に發達したと思われる物資の集散地に設けられたものである。亭がいかなるものであるかについては、最近中國の勞幹氏がぐくわしい考證を書いている。要するに、當時の中國内地の亭は交通上の重要地點に設けられたものであつた。(釋漢代之亭障與烽燧歷史(語言研究所集刊。十九本))そして、交道亭市とは、このような地點に設けられたものであつたろう。このように大都市の近郊に發達した物資の集散地の性格を存する衛星都市的なものは、王褒の僮約に「市聚」としてあらわれているもので、それは農村生産品と消費者との接合機關であつた。

長安内外の各市の市籍あるものがおさめる市租はどれ位あつたか、むろんわからない。しかし臨淄の市租は千金、といわれているから、(史記齊悼惠王世家)長安各市の市租の合計はそれをこすとも、下ることはなかつたであらう。市籍を有するものが市租をおさめたことは、漢書何武傳によつて明かに知ることができるが、それを毎日の賣上げから納入すべきものであつたかどうかは不明である。前記の市租千金の解釋について史記の索隱は、日々の賣上げ高からおさめるという解釋をとり、正義も同じ意見である。しかし顏師古は、必ずしも市租千金が、一日の賣りあげ高からあがつてくる税かどうかについては、何もいつていない。正義の著者張守節も索隱の著者司馬貞も、共に唐代の人であるから、おそらく唐代の現制度でその注を書いたものであらう。こうした市場に關する制度は唐以前においては、古い傳統があり、おそらく漢代においても同一であつたと思われる。(このような古い傳統については加藤博士前掲「宋代商稅考」をみよ)

市場内に生活する民衆が、いかに多かつたかは、漢書劉屈氂傳に

「戾太子が」四市の人をかりたて、おおよそ數万人をもよおして、長樂宮の西の門のところにといたり、丞相の軍と出あつて五日間にわたつて合戦した。

と、あるのを見ても、想像ができるであらう。

市場の規模と組織はどんなであつたろうか。三輔黃圖卷二の長安九市という條は、非常に讀みにくい文章で、おそらく何かのあやまりか脱文があると思われるが、張衡の西京賦(文選第二卷)や水經注卷十九渭水の條などを參考にして考えると、こんな風でもあつたろうかと想像されるのである。すなわち、長安城の北側の門の一番西に横門、又の名を光門というのがある。そこに大きな市場があつた。その市場は川のながれにかゝつた横橋という橋をさしはさんで、兩側に數階建ての市樓というのが建てられている。市樓は又旗亭樓ともいわれた。また長安城の南側の城門の一番東にあるのが杜門とよばれる門で、そこにも大きな市場があつたらしい。市名は不明である。ここには、當市樓という建物があり、市場の監督官廳があつたようであ

る。(三輔黃圖)總じて市は壁によつて圍まれ、その門には五階の樓が建てられ、市場内の店なみを一目に見おろすことができた。(張衡、西京賦三輔黃圖にいわゆる市樓とか當市樓とかいうものは、このような建物のことで、この建物の中に市場取りしまりの役人の駐在所があつたものと思われる。市場取りしまりの役人は三輔都尉に所屬していた。かれらは商人と財貨の賣買のことを取りしまつた。(三輔黃圖)市の監督の長は市令、又は市長といわれた。漢書貨殖傳に「王莽が〔王孫大卿〕を京司市師に任命した。これは漢の司東市令である。——という文章があるのは、その一例である。長安の東、西市の長官はみな「令」であつた。漢書食貨志下の王莽の經濟政策をのべたところに、——長安の東西の市令及び洛陽、邯鄲、臨淄、宛、成都の市長を改めて、五均司市と名づけた。——とある。つまり、長安城内にあつたと思われる東西市の長は「令」といわれ、その他の地方大都市に設けられた市場の長は「長」といわれていたのである。この令・長の下には市丞(漢書百官公卿表上)市嗇夫(漢書、何武傳)などがあつたと思われる。市場内には「列」とか「肆」とかいう同業者組合があり、(前引、西漢時代の都市に)それらは多分に、行政的意味をもつ、なかばオフィシャルな性格の職である「肆長」などとよばれたかと思われるものによつて統轄せられた。(周禮天官、內宰之職及)肆長のような職は、おそらくは半官選、半民選によつて任命せられたであらう。

市場内の同業者組合は、一つとところに集つて、のきなみを作り、百貨はそこで賣買された。この時分、字を覚えはじめたばかりの子供などは、——かし、がり、うり、かいなどには、市場のそれぞれの店なみにゆけば便利だ。——といつて貰、貸、賣買、販、肆、便などの字を教えられた。(史游の急就篇)また、經濟的利得にゆけめがなく、しかもカツギヤの多い都市生活者には、うらないは欠くことのできぬ商賣であつた。うらないは、いやしい商賣とされたが、(漢書卷七二)かれらも、また、市場の中に同業者の店なみをつくつていた。それは卜肆といわれる。司馬遷の原文かどうかは疑わしいが、史記日者列傳には、落ちぶれた名士、司馬季主のうらない者生活と、かれの長安名士との對談が記してある。かれらの話によれば、當時のうらない者のなかには、もちろん、欲に目がくらみ、迷信に固まつたおろかな連中を、あやしげなことをいつてたぶらかす者も多か

つた。またかれ季主のように、名士で世をかくれた人が、一、三人もの弟子を養成しながら、のんきに世わたりの手だてとして
 いる者もあつた。このような話を通して、當時の肆なるものの實體の一部がおぼろげながらもわかるように思われる。なお、
 桑弘羊の官營商業政策、いわゆる均輸と平準とが行われてからは、役人が市に出張して同業商人の町なみにまじつて營業した
 と思われる。(史記平準書)

市場は日中のみ開かれて夜はとじられた。淮南子に、

人は朝市場のそばを通る時は、せかせかするが、夕に市場のそばを通つても少しも急がない。これは夕には、(市場がと
 じられているから)求めるべき利益がそこないゆえである。(説林訓)

とあるが、いかにも市場の性格とその開かれている時間とを示した、おもしろいことばと思う。市場内は徒歩で通行すべきも
 のであつたらしい。史記の日者列傳に、市場の卜肆をおとすれた賈誼と宋忠の兩名が、市場の門を出てから車にのつた話があ
 る。それゆえに、一都城の中で車や人のみあう、はげしい人出のことを述べた文章は、決して市場内部の繁昌のみを記述し
 たものでなく、都市全體の景氣を記述したものであると思われる。たとえば、班固の西都賦に

〔城〕内には市街大に開け、民衆の居住區である里は千にものぼるかと思われる。

(三輔黃圖卷二によれば、長安城中の民衆の居住區は百六十あつたとある。)

は開かれ、百貨はそれぞれ同業商人の組合の町なみにわかれて賣買されている。路行く人々は身うごきもできず、車は後に
 ひきかえすきまもない本人出である。この大人出は長安の全城をうづめ、幾百となく建てこんだ街すじに流れ出してい
 く。太陽はたちこめる都の塵にうつつてぼおつと赤く、四方はどこまでもかすんでよく見えない。かれらの樂しみ喜びはは
 てもなく、男も女もいなかの連中とは、くらべものにならぬあかぬけた風俗である。だて者は王侯にもみまがう豪勢ぶり。
 みせやの女は御殿の連中よりではないか。町の顔役や仁義の親方はそれぞれに、一かど原常や春陵君を氣取り、うち
 つれだつては群をなし、馬にうちのつて町すじをかけぬける。(意譯)

とあるのは市場内の繁榮のみならず、さらに長安全市街にみちた繁榮の状況を、うたつたものと解釋しなければならない。班固の賦によれば、長安の市民生活は、一見たゞもう華やかな面ばかりのように見える。しかしほんとうに、そんな面ばかりであつたらうか？

三

漢書地理志の末にひかれた、朱轡の報告書によれば、こんな風に書かれている。

漢が興つて都を長安にたて齊の田氏、楚の昭・屈・景氏ら及び、多くの功臣の家族を長陵にうつした。その後、また、世々高官富人及び、多くの人々を使役する兼併家の家族を、諸陵にうつした。思うに、これはかの強幹弱枝というもので、決してたゞ御陵をお守りをするだけが目的なのではなかつたのだ。しかし、そのおかげで各地の人々がこゝに雜居することになり、風俗は統一的でなくなつた。華族たちは儀禮體裁にうきみやつし、富人は商賣さえ成りたてばよいといつた風。人をこき使うに妙をえた連中は町の俠客となり、良からぬ者となかまをくむ。南には終南山がせまり北は夏陽にちかく、けわしい地形の多いのを利用して盜賊となる者も多い。だから、こゝはいつも、世界有數のむづかしいところになつてゐる。郡國からのぼつてくる者は、ひきもきらず、なまぐらの無職者も多い。民衆は農業をきらつて商工業にはしり、華族の生活は王室をしのぎ、民衆はそれをまねるにいがしく、恥を知るなどはおろかなことだ。婚禮葬儀はすべて度を過ぎ、ぜいのかぎりをつくす。

といつてゐる。これは三輔の風俗を説きつくしてあますところなし、という名報告であらう。

當時の都長安は實に、一方では巨万の富をつむ豪族商業家や傳統的な華族の一團があり、(西都賦の三選七選)一方には權勢家をたくみにあやつつて惡事にふける、不良のやからが黨をなしている。漢書趙廣漢傳に

廣漢が京兆の尹の役目を取り行つていた時、たまたま昭帝がなくなつた。そこで新豐の杜建なる者が、京兆の掾となり、昭帝をほうむる平陵のお墓の工事を監督することになつた。この建という男は、もともと大した俠客で、たくさんの居候連中が出たり入つたりし、かれらはつねによこしまの利益をむさぼつていた。廣漢はそのうわさを聞いて、遠まわしに警告していたが、建にはいつとう通じない。そこで起訴して裁判に附した。ところが、宮中や政府の相當な人々は、すべてかれのために嘆願したけれども、廣漢はついに一つも聞きいれてやらなかつた。

とあるのはその一例である。また巷には、天災と惡政で没落した貧民のために、その住宅地が設けられたこともありはするが、それはまつたく氣まぐれのことすぎなかつた。(漢書平帝紀元始二年の條) しかも、一方には游俠とて暴力と仁義とを賣物にする連中があり、長安の市場、財貨と權勢のうづまくあたりを根城として、さすがの大長安をせましと横行する。かれらは暴力惡事の團體を組織し、法律を無視し、無力の貧民をしぼり上げ、殺人業者を養成し、また武器や專賣品の密造に従事する。漢書の游俠傳中の萬章傳に、こんな文がある。

長安は非常に繁盛しており、町々には各々大した俠客が住んでいる。章は城西の柳市というところに根城をかまえ、「城西の萬子夏」と呼號していた……。王尊が京兆の尹となるや、こうした俠客たちをふんづかまえた。かれは章や矢作りの張回、それから酒やみ市の趙君都・賈子光を殺してしまつた。これらの連中はみな長安の名だたる俠客であり、なぐりこみ引請業、殺人業などを商賣としていたものである。

また漢書の王尊傳には、そのような連中が手におえぬ惡事をはたらいていたことを次のように述べている。

長安にとぐるをまく大親分たち、東市の賈萬・城西の萬章・矢作りの張・やみ酒の趙放・杜陵の楊章らが、みな類をもつて集り、惡者なかまをかばいあつた。かれらは法律をおかし治安を亂し、ふんだくりや、とき使いの限りをつくし、罪なき人民どもを侵して町の狼となつていた。何人の知事が變つても、二年かかつて、かれらを逮捕することさえできなかつた。

市場の中には、常習的な万引き團があつて商人たちを苦しめた。かれらは秘密な組織をもち、その長はまるで君子のごとく生活し、人々の尊敬をさえうけている。漢書の張敞傳にその例が見られる。いわく、

長安の市場には盜賊がきわめて多く、商人たちはそれに苦しめられた。天子が張敞にどうしたら良いかと聞いたと時、かれは自分なら彈壓することができると答えた。そこでその職務に従事するようになるや、かれは長安の世話方たちを集めて、まず事情を聞いたところ、「盜賊の酋長は五六人おり、かれらはみな溫厚な風をよそおい、外出する時にはたくさんのお供をひき連れている。そこで町の人々はみんなかれらを長者だと思いこんでいる。」ということであつた……。

暴力團の長は富の力を利用して人々を支配し、政府の大官といえども、かれらを手なづけるのでなければ、何事もできない。かくて顔役的大商人は同時に官設市場の堂々たる長とさえもなることができたのであつた。(漢書貨殖傳の終の王孫大卿の傳) 長安の近郊、ことに終南山は盜賊の巢であり、時に長安をおそつては漢の警備の無力ぶりをばくろさせた。(王尊傳におけるかれの功績をたゞえる民衆の上奏文) 長安の夕まぐれ、突如として砂ぼとりがまき上ると見るや、追はぎは出現して町ゆく人を打殺し、あわれ罪なきしかばねはあちこちのころがり、危険をつげるつづみの音のみむなくひびく。漢書の酷吏傳中の尹賞傳に

城中の夕まぐれ、塵がたち上ると見るや、追はぎはあらわれ、ために死傷した者は路によこたわつて、警戒の太鼓の音のたえ間がない。

とある。こうして西漢の都長安は、権力と經濟力におけるピラミッド的社會構成のもと、(本稿一及び、西漢時代) 欲望と暴力と貧乏と罪惡のうづまく都市であつた。こうした大都市の治安を維持するためには、長安だけ獨立しては、その効果は決して望めない。三輔が一體なのはこのためでもあろう。名長官趙廣漢は——わしの長安行政をみだす奴は、いつも右扶風と左馮翊の連中だ。わしに三輔をみな任せてくれたら、すぐ面目を改めてくれるのに……。 (漢書の傳) ——と嘆いている。かれは三輔一體の強化を主張しているのである。三輔の長官は、地方のむつかしいところを歴任した、えりぬきでないと完全にはつとま

らなかつた。漢書の卷七十六、卷九十、卷九十二の諸傳を參考し、それに燕京大學で出したインデクスー引得——を利用すれば、そのことはたゞちにわかるであらう。しかし、そんなえりぬきでも、多くは長つゞきはしなかつた。(漢書張敞傳)循吏といわれた黃霸のような人物は、この地の長官としては數ヶ月もつゞかなかつたのである。(同上)相當荒つぽいやり方をしたが、しかし趙・張・三王といわれる人は、いつまでもその名長官ぶりをうたわれている。(漢書卷七十六の贊)かれらの名は、趙・廣漢・張敞・王尊・王章・王駿である。だがかれらもその終りはあまり良くはない。(彼等の傳)

三輔の長官として成功した人々のやり方は、いづれも強烈な警察政治で、ひどく血なまぐさいものであつた。かれらは細密に組織せられたスパイ網をたくみに利用した。趙・廣漢の傳に、かれのこのようなやり方が書かれている。

かれは京兆の郡中の盜賊や、住宅區に巢くう俠客たちの根城や親分の動靜からはじめて、役人たちの不正な金錢の受授などの事實は一々これを知りつくした。長安の不良青年たちが、五六人街はすれのあき家で強盜の相談をしたと考えたまえ！まだ話しもおわらぬうちに、早くも廣漢の警官隊が逮捕にやつてきて、事件の全容がたちまち明らかになるといふ風であつた。

かれはまた、暗黒社會の組織を逆用したり、投書を利用したりした。前に引用した張敞の傳のつづきに、

敞は盜賊の親分を呼びだして問責したのち、その罪をゆるしてやる代りに、手下の盜賊たちをおびき出して、罪ほろぼしをしろと命令した。親分たちは、「今急に手下どもを局におびき出せば、奴らはびつくりするでしょう。わしらをちよつとの間だけお役人さまにしてください。お旨はたしかに引きうけました。」という。そこで張敞はかれらを一時的役人に任命し、家にかえつたら、就任のお祝だといつて宴會を開くようにと申しつけた。そうとは知らぬ手下どもは、みなお祝に集つてきて、飲めやうたえの佳境にいたつた。親分たちは、ころはよしと、手下どもの着物のすそに、赤つちで、目じるしをつけた。一方警察官は居住區に出張していて、家から出てくる奴をば一々検査し、赤つちのついたのは全部逮捕してしまつた。

こうして、一日に數百人をつかまえ、その犯罪事實をあきらかにし、一人にして百餘件の犯罪事實を自白させ、ことごとく處罰した。このようにして警戒の太鼓はなりやみ、市場には盜賊のあとが絶えた。

というのがある。これは暗黒都市の犯罪團の組織を逆用したものである。また史記の酷吏傳中王溫舒のことをしるしたところを見ると、

かれはもともと、三輔の風俗についてはよく手なれており、だれだれがボスの役人であるかをよく知っていた。そこで、ボスの役人はかえつて全部かれの腹心と化した。かれは、いろいろの方策をたて、かれの部下どもは盜賊の不良少年たちを手きびしく檢察し、投書用の箱を作つて惡事を告發させた。

とあるのは、社會的惡習の逆用と、投書政策の採用をいつたものである。そして長官たちは、かれらを檢舉すると、手ひどい刑罰をあたえ、大屠殺をもあえて辭せなかつた。かれら名長官といわれる人も、みな末路がよくないのは、この大屠殺のためであつたし、かれらが酷吏といわれるのもこのためであつた。史記の酷吏傳には「屠伯」すなはち、「人殺し大名」といわれた長官さえある。漢書の尹賞傳に、かれが長安の不良青年がりをよくおして、いく百人を虐殺し、そのしかばねを役所の門の東にうめ、かれらの罪狀をしるした高札をその上にたてたため、かれら不良青年どもの親族はみな、そのしかばねを求めて、聲をあげて泣きさけび、路ゆく人もためにもらひ泣きしたと記されている。だから、當時の長安にはこんな流行歌がはやつていたという。——わが子の死骸はどこにある？ 役所の門の東がわ、極道者の墓場へおいで！ 生きてた時はろくでなし、死んでもまともなお墓にや眠られない。（意譯）——

一二世紀のところにいたつて三輔地方は急激におとろえ、長安の繁昌は昔日に比すべくもなくなつた。その人口は大量に他の地方をさして流亡した。（後漢書西羌傳）一二世紀中ごろの崔寔の政論によれば、三輔の地はすでに全く「土曠人稀」つまり土地のみ廣く、人口は極度に少ない地方の一つと化していたのである。（通典卷一に引用された政論の逸文）

Ch'ang-an (長安) under the Western Han (漢) Dynasty

Kiyoyoshi Utsunomiya

The present article forms a supplement to his article "On the Cities in the Western Han Period" which appeared in *Toho-gaku*, vol. II. In the Western Han period Ch'ang-an was the centre of "fashion" or "vogue" in urban life, and it was, moreover, the model town at that time. Studies of this city seems, therefore, to throw light upon urban life in general under the Western Han dynasty. Fortunately, a considerable amount of material is available for such studies, and in the present article are made use of *Shih-chi*, *Han-shu*, and fragments of some lost texts of the Han dynasty found in various cyclopaedias of later ages. Ch'ang-an which prospered during the Western Han period showed a sudden decay with the advent of the Eastern Han dynasty. As Pan-ku said, Ch'ang-an represented in fact the Western Han dynasty itself not only in its military aspect but in its industrial feature.

The Plan of Lo-yang (洛陽) under the Northern Wei (魏)

Shikazo Mori

First of all the fact should be noted that the Lo-yang of the Northern Wei period had inner and outer cities, the former measuring 6 li east to west and 9 li south to north and the latter 20 and 15 li. The inner city was planned after those of Later Han, Wei and Western Tsin. It was in 501 A.D. in the Northern Wei period that the suburb was absorbed into the outer city. This fact, i. e., existence in the time of Northern Wei of the inner and outer cities, has hitherto been unnoticed. The author, then, makes comparison of Lo-yang with Ta-hsing under the Sui (Ch'ang-an under the T'ang). Between these two ancient capitals there were some essential differences due